
ハイファイ・メッセージ

瀬上タ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイファイ・メッセージ

【Nコード】

N0501I

【作者名】

瀬上夕

【あらすじ】

「あいつと別れる。いや、別れてくれ」——生まれて初めて出来た彼氏に浮かれる晴香の前に生意気な後輩が立ちふさがる！？彼の狙いはなんなのか。「絶対別れたりなんかするもんですか！！」甘々ラブコメディを目指します。一部「ランニング・ハイ」と世界観がリンクしていますが、読んでなくても充分物語は分かると思います。

始まりは甘い毒（前書き）

ちよつとずつの短い連載になりますが、よろしくお願いします。

始まりは甘い毒

「——いいよ」

その一言は毒だった。あたしの全身を貫いた甘い甘い毒。くらくらする。

「どうしたの？　ぼけっとしちゃって」

クスクス笑いながら彼が顔を近づけてくる。

「だ、だって今……」

「うん。いいよって言った」

「うそ……」

「うそじゃない。俺も好きだよ、春瀬さんのこと。だから」

——付き合おう？

彼の唇の動きを信じられない気持ちで見つめる。

あたしに初めて彼氏が出来た瞬間だった。

「告ったああ!？」

飯田美稀は目を血走らせてあたしの肩をがくがくと揺らし、絶叫した。

「なんで！　いつ！　結果は！　ていうか、なんで私に一言も相談がないのよ!？」

「ご、ごめ……一度に聞かないで」

「相手はやっぱり——」

「うん。カナメ先輩」

名前を言うだけで胸が締め付けられる。坂井カナメ。それがあた

しの昨日出来た彼氏の名前。

「で？ で？ 付き合うの？」

「うん……」

「うっそお！？」

「何よ、その反応」

「だって坂井先輩って、あの坂井先輩でしょ？ 陸上部の主将の」

「その坂井先輩だよ」

「はあ……あんたが坂井先輩を射止めるなんて信じられない」

ひどい言われようだ。けど、美稀が言ったことは正論。顔よし、

成績よし、おまけに陸上部部長のカナメ先輩に比べて、あたしはどこにでもいる何の取り柄もない女子校生だもの。

「言われなかったって分かってるよ。あたしがカナメ先輩と釣り合わないことくらい」

「そういう意味じゃないけどさ……」

何かぶつぶつ言っている美稀を横目にあたしは幸せいっぱいだった。

だって、突然震えだした携帯のディスプレイには『カナメ先輩』の文字。メールだった。

『件名：無題』

本文：今から中庭に来れるかな？ 待ってるね。無理だったらメールちょうだい』

「ほら、証拠」

あたしは、どうだ、とばかりに美稀の鼻先に携帯を突き出した。美稀は、肩をすくめて苦笑した。

「分かった分かった。ほら、早く彼んとこ行きなっ」

「うん！」

「あ、晴香！」

走り出そうとしたあたしに声がかかる。振り返ると美稀の優しい

笑顔があつた。

「おめでと」

「ありがとう！」

幸せだった。

怖いくらいに――。

花園の侵入者

カナメ先輩と会ったのはいつも中庭だった。もちろん最初に会ったのも、ここ。

彼は花壇の横のスペースで寝ていた。長いまつげ通った鼻筋、長身で、少し汗ばんでいた焼けた肌。どれもがあたしにはきらきらして見えた。

初対面の人を、しかも寝顔をまじまじとみるなんて失礼かもしれないけど、あたしは彼の顔に惹きつけられていた。瞬間、カナメ先輩が目覚めました。ばちつと音を立ててあたし達の視線は交わった。

「……」

「……」

「……あの……」

その時あたしの頬は火をふいた。

「ご、ごごご、ごめんなさいい!!」

「え？」

「べつにずっと見てたわけじゃなくて！ ええと……」

クスクスと彼は笑った。

「君もサボリ？」

「え、ま、まあ……」

「そう。じゃあ俺たちは共犯だ」

きらきらした笑顔が眩しい。

「よろしく共犯者」

その瞬間、あたしは恋に落ちた。

——さく……。

近づいてくる足音で我に返った。

カナメ先輩が来た！

そう思つて振り返つたあたしの期待は打ち碎かれる。

立っていたのは小柄な見たこともない少年だった。校章の色を見る限りたぶん一年生（うちの学校は学年で校章の色が違う）。あたしの一つ下の後輩だろう。けっこう、ううん、すごく綺麗な顔をしてる。童顔なのだろうが、すっきりとした切れ目が彼の子供っぽい印象を拭い去っていた。

少年は何も言わず、じいっとこちらを見続けている。

ち、沈黙が重い……。

「ええと……」

「アホ面」

「……」

はい？

この子、今なんて？

「あ、あの？」

「あんた、春瀬晴香？」

「そ、そうだけど」

「名前に二つも『ハル』が入ってるなんて、あんただけ頭ん中お花畑なんだよ」

は、はああああ！？

なによコイツ！

けど、ここは年上の余裕を見せないと。

あたしは怒りをぐっと押し込めた。

「なんであたしの名前知ってるのかな？」

「あんた、坂井先輩の彼女だろ」

「ま、まあ」

——彼女、かあ……。

思わず頬が緩む。まだ慣れないな、この感じ。

「出たよ、アホ面」

笑みを急いで引つ込める。

「あ、あのねえ……さっきから先輩に対して失礼じゃない？」

「初対面の先輩の寝顔隠し撮りは失礼じゃないの？」

「！」

少年は勝ち誇ったように笑った。

実はあの時、カナメ先輩が目覚ます前に、思わず携帯のカメラで撮影してしまった。だけどそのことはあたししか知らないハズなのに。

「な、なんで、そのこと……」

「俺なんでも知ってるよ。あんたと坂井先輩のこと。出会いも、昨日告って付き合いだしたことも、ゼーんぶ」

「……なんなの、あんた」

「一つあんたに忠告してあげよう」

ダメだ。会話になってない。

「あいつと別れる」

——え？

「別れた方がいいよ」

「な、なんでよ」

「あんた、浮気されてるもん」

ぐらつと足元が歪んだ気がした。

「し、信じない」

「相手の名前言ってあげようか？」

「や……」

「神田利彦。陸上部の後輩だよ」

え——。

「まあ信じないなら今日の部活見てみなよ。二人すつごく仲良いからさ。あ、そういえば、坂井先輩ここには来ないから。さっきのメル、先輩の携帯借りて俺が打ったヤツだから。ごめんねー。じゃ」少年はそんなことを言っただけで帰っていったけど、最後の方が全然聞こえていなかった。

坂井先輩は今日ここには来なくて、別れた方がよくて、浮気……ていうか、浮気相手って……

お、おとーおおお！？

花園の侵入者（後書き）

お読みくださりありがとうございます（^^）次回の更新は9月26日を予定しています。次回はこんな「先輩、嘘って言って下さい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0501i/>

ハイファイ・メッセージ

2010年10月10日03時57分発行